

「貧」の文化伝統 環境日本学事始

浅見和彦

1 環境日本学の出発

最近、私が考えていることに環境日本学という言葉がある。確信はないが、おそらくこの言葉を使い出したのは、私が初めてではなからうか。当初使い始めたころ、ある編集者は「平気ですか」「大丈夫ですか」といささか困惑気味であったことを今でも憶えている。しかし彼女（編集者）の困惑、当惑をよそに、私は自分の紹介欄などで「専門 環境日本学」などとおおげなくも使い続けてきた。いささか内心、気恥ずかしさもあつたことは否定できないが、ここで引き下がったら、もつと恥をかき、無念さも残るうかと思ひ、あえて知らぬ顔を決めこんで使い続けてきた。

時間が少しずつ経ち、世の中全体も環境という問題を以前よりは話題にし、真剣に検討する傾向が見え始めたこともあって、私が勝手に言い続けている「環境日本学」という言葉に目を向け、また関心を持つてくれる人が徐々に増え始めてきた。そして日刊建設工業新聞という建設業界の専門紙なのであるが、二〇〇八年五月一三日に「環境日本学、提唱する浅見和彦氏」「音、明かり、手仕事、風景 伝統の良さ 現代に生かす」という見出しで、紙面の半分以上使って、私の

インタビュー記事を掲載してくれた（別添資料）。かなり長時間のインタビューに基づいてのものであったが、記者の横川貢雄氏によって、大変に要領よく、簡明にまとめ上げてくれて、嬉しかった。その後、「環境日本学って、何ですか」と質問されるたびに、私は「まずこれを読んで下さい」とその記事のコピーをお渡しすることを常としていた。その後も全国建設研修センターの発行する「国づくりと研修」（二二二号、平成二〇〇七年七月三〇日）の「舟運都市の再興」という特集の中で、都市環境研究会会長の三浦裕一氏と「都市の水辺空間と舟運」という論題で対談する機会に恵まれた。その中で三浦氏は「遠くで近きもの、極楽、舟の道、男女の仲」という『枕草子』の文章を引かれながら、

ヨーロッパの運河を歩いていた時のことですが砂利やセメントを積んだ船が運河をゆったりと行くんです。その船頭さんに、どこへ持っていくんだと聞くと、ドイツから中部フランスまでという。一週間かかるんです。日本の建設業だったらそんなに待てないですね。三時間後に持つてこい、明日までに納入しろとかね。ところが向こうは、供給側も、注文主も、その一週間をきちんと工程の中に組ん

でいるわけです。なぜトラックで運ばないのかというと、砂利に道路を走る高コストはかけられない、だから時間でカバーして安い運賃で運ぶんだという発想なんです。日本にはそうした発想がありません。

と発言された。この言葉には大いに蒙を啓かれた。「遠いように見えるが、実は近いのだ」と舟運の本質を看破した清少納言の直感力もさることながら、現代ヨーロッパではゆつくりとした、低公害の舟運を現実の産業体制の中で現役として活用しているのである。

この夏（二〇〇八年）からパリ、セーヌ川にはボゲオ（Vogueo）という通勤、通学船が就航した。パリ市内のオーステルリッツ駅から郊外のメゾンアルフォール駅までを四十分間で結ぶ。値段は三ユーロ（約三〇〇円）。早速、私も乗ってみたが、なかなか快適だ。ゆつたりとしているのが特に良い。パリの街を河からゆつくり見られるが何より嬉しい。そして新しい発見もあった。パリ中心街からメゾンアルフォールまでのセーヌ河上流の河畔には商品の倉庫や資材の置場が建ち並び、ノートルダム寺院やルーブル美術館などが造り出す美しい風景とは全く違う、パリのもう一つの顔を見せている。パリの実業的な側面を見る思いだが、その河岸には荷役船が幾艘も係留され、また荷物を一杯に積載した貨物船がセーヌ河を頻繁に行き交っている。これが都市なのだ。数ある名建築によって演出されるのがパリなら、倉庫や資材置場や荷役船もパリなのである。偶目したこのパリの姿は現代日本の都市問題を考える上で、一つの指針となるではないかと思った。

2 糶汰瓶一つも持つまじき

日本の中世の代表的な作品として『徒然草』はよく知られているが、その九八段をちよつと覗いてみよう。「尊き聖の言ひをけることを書き付けて、一言芳談いちごんほうだんとかや名付けたる草子を見待りしに、心に合ひて覚えしことども」と始められる二節の中に、

後世ごせを思はむ者は、糶汰瓶じんだがめ一つも持つまじきことなり。持経ぢきやう、本尊ほんそんに至るまで、よき物を持つ、よしなきなり。（九八段）

後世で極楽往生をしたいと願う者は、「糶汰瓶一つ」であつても持物にしてはいけない。普段読み上げる経典の本にしても、いつも手を合わせる仏像にしても、良い物を持つことはよくないことだ。

多少、解説を付け加えると、「糶汰瓶」とはぬかみそ瓶のこと。生活用品の中でも最も粗末なものの一つで、いわば生活する上での最低限の必需品といつてよい。『一言芳談』（中世の仏教書）の教えによれば、極楽往生を願う者はたとえ粗末な「糶汰瓶一つ」であつても所有するものがあつてはいけないといふのである。

そうした所有否定の考え方は日常生活の品々だけではなかった。修道者にとつて不可欠の「持経、本尊」、すなわち読誦看経するための経典にしる、敬仏、礼拝する仏像にしても、良い物を持つては絶対にいけないといふのである。それら修行のための仏具、法具であつても良い物であれば、そこに執着がおこり、欲望は目覚め、押え難くなつてくるからである。だからこそ良等な物は修行の障碍となり、悟道のために大いなる妨げとなつてしまふのである。高級な物は要らない。経

典であれ、持仏であれ、粗末なもので十分なのである。ちょっとした物への愛着心は大きな執着心へといつても変じうる。だからこそ物に愛着してはいけない、物を持つてはいけないのである。ここには徹底した貧の思想がうかがえる。

『徒然草』の中にはこうした貧の思想を随処に指摘することができさる。

賤しげなる物。あたるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。持仏堂に仏の多き。前栽せんざいに石、草木の多き。家の内に子孫の多き。人に逢ひて言葉の多き。願文に作善多く書き戴せたる。

多くて賤しからぬは、文軍の文、塵塚の塵。(七十二段)

兼好にいわせれば、身の回りにやたらと「調度」(道具、家具類)が多いのも「賤しげ」(下品)であるし、硯箱に筆、持仏堂に仏が沢山立っているのもいやらしく、下品であるといっているのである。「前栽」、すなわち庭に石や草木が所狭ましとばかり置かれているのも不愉快だし、家内に子孫や孫が大勢いるのも品がない。人に逢ってペラペラしやべりまくる人は本当に迷惑だし、自分の善行をこれでもか、これでもかと細大もらさず書き上げている人などを見てると、うんざりしてしまふ。数多くても賤しくないのは、本の箱車に載せられた本、塵塚(ごみ捨て場)の塵ぐらいであるというのが大体の内容である。

多いことを喜ぶのが人間の心理である。物が多いこと、豊富なことに幸福を感じる人も少なくないであろう。しかし、兼好は逆を行く。物が多いことは賤しいことであつて、下品なのである。『徒然草』の

中で「家居のつきづきしくあらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ」という言葉で始まる住居論の中でも、住いについて、多くの匠たくみの、心を尽してみがき立て、唐からの、大和の、珍らしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき。また、時の間の烟けぶりともなりなんとぞ、うち見るより思はるる。

大方は、家居にこそ、ことさまはおしはからるれ。(十段)

沢山の職人が心を尽して仕立て上げた品物の数々、舶来の中国のものはたまた日本のもので、珍らしく、高価な高級品を並べたて、庭の草木まで人手を加えて、自然なかたちを壊しているのは、見ていて、とてもつらい。家の様子を見れば、すべてがわかる、というのである。兼好の嫌いなものは財力や金力にまかせて、内外の高級品に飾り立てられ、庭はといえば、珍石、珍木の類を諸国から取り集め、所構わず植え置き、無理矢理、枝や葉をねぢまげ、刈り込んだ庭は完全な失格なのである。兼好の推奨する住居、庭は物が少なく、あつさりとして、自然のままが最高なのである。

3 「貧を学べ」

こうした住居観の実践的な例が草庵といわれるものであつて、その典型として挙げられるのが、鴨長明の居住した方丈の庵であろう。長明が日野(京都市伏見区)の山中に構えた庵は、
広さはわづかに方丈、高さは七尺がうちなり。(方丈記)

と自ら述べるように、きわめて狭隘で粗末なものであった。

東に三尺余りの庇ひさしをさして、柴折りくぶるよすがとす。南、竹の簀すのこ子を敷き、その西に閤あかたな伽柵をつくり、北に寄せて障子をへだてて、阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかき、前に法花経を置けり。東の際にわらびのほとろを敷きて、夜の床とす。西南に竹の吊り柵を構へて、黒き皮籠三合を置けり。

庵の東側には三尺ほどの庇、南に竹の簀子と閤伽柵、室内には阿弥陀如来と普賢菩薩の絵像と法花経、そして蕨の寢床。前引の『徒然草』(九八段)では「糶汰瓶一つも」「持経、本尊に至るまで良き物を持つ」ことが堅く戒められていたが、『方丈記』に描かれる長明の草庵はこれに極めて近いものといふことができる。豪華な邸宅より、小さく粗末な家を、立派で高価な品物に囲まれるより、ささやかで質素な品々を友として、知足の生活を送る。これが中世人の理想であったのである。ここにあるのは貧の思想、貧の文化であるといつてよい。富を嫌い、貧に親しむ理想といつてよいであろう。

こつした考え方を積極的、徹底的に推し進め、実践しようとしたのは長明とほぼ同時代の禅僧道元(一一〇〇～一五三三)であろう。彼の談話録『正法眼蔵隨聞記』(懷槩)には、「学道の用心」、すなわち仏道修行の心がけについて、こんな問答が載っている。

一日、僧来つて、学道の用心を問ふ。
示して云はく、学道の人は、先づ、須すべからく貧なるべし。財多ければ、必ず、その志を失ふ。

在家学道の者の、なほ、財宝に纏まとはり、居所を貧り、眷属に交れば、たとひ、その志ありといへども、障道の因縁多し。

古来、俗人の参ずる、多けれども、その中に善しと云ふも、なほ、僧には及ばず。

僧は、一衣、一鉢の外は、財宝を持たず、居所を思はず、衣食を貪らざる間、一向に学道すれば、分々に、皆、得益あるなり。その故は、貧なるが、道親しきなり。(三ノ十一)

やや長い引用になつてしまつたが、ここには道元の貧にかかわる思想が過不足なく言明されている。大意はここである。

ある日、一人の僧が道元の許を訪れて、仏道修行の第一の心がけといふものを尋ねた。道元の答えは、仏道修行を目指す人の第一の肝要は貧であるということだつた。なぜならば、財産が多ければ、必ずや修道の心を見失つてしまふ。一般の在家の人はややもすれば、財宝に心移りやすく、解き放たれることもなく、住居についても心悩ますこと多く、欲望は絶えない。他の人々と交わることも多いので、仏道修行に専心しようと思つていてもなかなかできないのである。それに對し、僧侶は一枚の衣、一個の鉢以外には財物は持たないし、住居にもこだわりがない。衣食について食する心がなく、ひたすら修行に勤とせむゆえ、段階々々に応じて得るものがある。なぜなら貧であることが、最も仏道に近いからである。

道元は物を前にして動揺する人間の心を見抜いていた。眼前に物があれば、心は常に奪われ、欲求は増すばかり。それに対し、僧は目の

前に物がなから、心乱れることなく、自然と仏道修行に専心することが可能であるのだ。物があれば、妨げとなる。物がなければ、心は解き放たれる。物がなから、すなわち「貧」であることが、仏道に最も親近している状態なのであるというのである。

こうした道元の主張は『正法眼蔵隨聞記』の中で度々繰り返される。夜話に云はく、学道の人は、最も貧なるべし。(三ノ四)

学道は、ただ、須らく、貧を学すべし。名を捨て、利を捨て、一切諂ふことなく、万事投げ捨てれば、必ず道人となるなり。(五ノ二) 道を学せば、ただ貧なるべし。…褒めて後代を薦むるには、皆貧にして、財なきを本とす。(五ノ五)

「貧」を「学道」の中核的思想に安置しようとする道元の思想にゆるぐところはない。道元はまたこうもいう。

示して云はく、学道の人、衣糧を煩ふ事なかれ。ただ、仏制を守つて、世事を営む事なかれ。(一ノ一六)

ただ、心を世事に執着する事なかれ、一向に道を学ぶべきなり。仏の言はく、衣鉢の外は、寸分も貯へざれ。(一ノ一六)

行道を専らにして、衣食を求むべからず。(六ノ三)

学道の人、衣食に煩ふことなかれ。この国は辺地、小国なりといへども、昔も顕密の二道に名を得、後代にも人にも知られたる人、未だ、一人も衣食に豊かなりと云ふことを聞かず。皆、貧を忍び、他事を忘れて、一向に、その道を好む故に、その名をも得るなり。況んや、学道の人、世度を捨て、一切に走らず、何としてか豊かな

るべきぞ。(六ノ四)

「衣糧」「衣食」、すなわち衣服や食糧に惑つことを道元堅く諷めていゝる。「世事」「世度」は社会一般での生活や仕事、こうしたことに関わり合い、心を砕き、悩ませることはあつてはならないという。過去に於て、顕密の世界で後々まで知られる人はすべて「貧を忍び、他事を忘れて」、学道に励んだゆゑ、その名が知られるようになった。こうした偉大な先人たちには一人として「衣食に豊か」であつた人はいないと断言するのである。

同様の発言は『徒然草』からも拾つことができる。

人は己れつつまやかにし、奢りを退けて、財を持たず、世を貧らんとぞ、いみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。(一八段)

質素で奢侈を嫌い、財産もなく、かつ貪欲とは無縁という生活が究極の理想なのである。昔から「賢き人」といわれる人で裕福な人は一人もない。この兼好の言葉と道元のそれはびつたりと重なり合つ。

4 プラスの文化志向とマイナスの文化志向

さて近代、現代日本の現況はどうであらうか。貧富の問題についていえば、あきらかに「富」を尊しとし、「貧」を賤しとして、誰しもが「貧」を忌み嫌う。貧富の価値観は対極的であつたといえる。もちろん中世に於ても「富」を願ひ、「貧」を追い求めることもあつた。

人はよるづをさしおきて、ひたふるに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。(徒然草、二二七段)

という処世観が語られ、現実に「宮殿楼閣」に住まい、この上ない贅沢を尽くしていた人も少なかった。しかし一方では、その「宮殿楼閣」を意味ないものとして、忌避する思想も強かった。富、蓄財を志向する通常の流れに対して、それを否定し、貧しさの尊さを強調する風潮も強かった。その強さが中世と近代では大きく違ふ。いわば、富と貧というプラスの志向に対して、貧と富というマイナスの志向を中世という時代は合わせもっていた。そこが中世と近代では決定的に異なっているといえよう。

考えて見れば、近現代の日本はプラスの志向で突っ走って来た。いや今なお突っ走っているといえよう。「大きいことはいいことだ」という発想のもとに、建物も町もアツという間に巨大化し、多くの企業は利潤の一層の追求に走り続けている。高速道路、新幹線は継々と建設され、速さ、速くあることがすべてに優先するともいいたいがな勢いで、社会の構造基盤があれよあれよという間に造り変えられてしまつた。速いことは常に正しく、善であつて、遅いことは常に悪で、邪魔でさえあるのだ。大都市圏で電車の切符を買うにしても、改札口を通るにしてもまごまご、のろのろしていれば、後ろから突き飛ばされかねないのが、現代日本のいつわらざる姿なのである。

それだけではない。町中は色と音で溢れている。少しでも他社よりも目立とうとして、赤、青、緑、黄色。金色まで使つて、轟々しいままで塗り上げた数々の広告、途方もない大きさで周囲の街並や景観にはほとんど配慮した気配がつかえない広告や看板は、日本中、どこに

でも発見できる。

そして、それらの広告に付きまとう大音量の宣伝の放送。街中のみならず、テレビの番組中に繰り返される広告、宣伝。その多くが商品名の連呼であるのが、とても哀しい。

かつて日本人は墨絵の世界の幽玄な奥深さに安息、沈潜し、小さな声、ささやかな音に耳をそば立てて、物の情趣や風合を楽しんでいたことを忘れてしまったのだから。風鈴の音、鹿威しの音、風の音に雨の音。その一つ一つの微細な音がかげえのない安らぎと癒しを持つていたのである。かしましいまでに鳴り響く大音響の現代社会にあつては、とうてい味わうことのできない、豊かな弱音の世界を古人はたつぷりと享受していたのである。

5 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』

谷崎潤一郎の名随筆『陰翳礼讃』に次のような一節がある。

今年の秋の月見に何処がよかろうと首をひねつた揚句、結局石山寺へ出かけることに極めていと、十五夜の前日の新聞に石山寺では明晩観月の客の興を添えるため林間に拡声器を取り付け、ムーンライトソナタのレコードを聴かせると云う記事が出ている。私はそれを読んで急に石山行きを止めてしまった。

十五夜の晩ゆえ、訪れる観光客に喜こんでもらおう。観月の雰囲気盛り上げようということで、スピーカーを取り付け、ムーンライトソナタを流し続けるという仕様には、明月を静かに眺め味わうという

発想は全くない。音楽が絶え間なく流れ続ければよい、それもかなうことならば、出来る限り大きな音で、激しい音で鳴り響くのがよいという発想は現代日本の随処で見受けられる。静かさを味わう、一つの物音さえ響かない寂寥の中に身を置き、観照するといった振舞は、もう日本人の中からは消え去ってしまったのだらうか。

谷崎が石山寺行きを取り止めた理由はもう一つあった。谷崎の脳裏には一つのいやな予感がよぎったからである。彼は前段に続けて、こついつ。

拡声器も困り物だが、そう云う風ではきつとあの山の方々に電燈やイルミネーションを飾り、賑々しく景気を付けてはいないかと思つたからである。前にも私はそれで月見をフイにした覚えがあるのは、或る年の十五夜に須磨寺の池へ舟を浮かべてみようと思ひ、同勢を集め重詰めを持ち寄つて繰り出してみると、あの池のぐるりを五色の電飾が花やかに取り巻いていて、月はあれどもなきが如くなのであつた。それやこれと考えると、どうも近頃のわれ／＼は電燈に麻痺して、照明の過剰から起る不便と云うことに対しては案外無感覚になつてゐるらしい。お月見の場合なんかはまあ孰方でもいければ、待合、料理屋、旅館、ホテルなどが、一体に電燈を浪費し過ぎる。

谷崎は同好を語らつて、須磨寺の池の船上で弄月の遊びを計り、そつて繰り出したまではよかつたが、肝腎の池は、その池畔に五色の電球がぐるりと廻らされていて、折角の月見の興趣は台無しになつてい

たといつのである。その電燈の明るさで、「月はあれどもなきが如く」であつたのだ。谷崎は言つ、「近頃のわれ／＼は電燈に麻痺」してゐるのではないか。「一体に電燈を浪費し過ぎ」てゐるのではないか。「照明の過剰から起る不便」といふものに気付いてゐないのではないかと問題を投げかける。

谷崎が疑問視し、苦言を呈した「明かり」の現状はもつともつと凄まじい。都心部はもとより郊外の町に於ても街頭の照明は度を超えてゐる。もちろん危険防止や安全という面から一定の照明が必要なことはいつまでもない。しかし街路といい、巨大な商業ビルといい、明らかに必要度を超えて、野方図までに電飾はきらめき、夜の暗さはどこかに駆逐されてしまつた。とくに近年はクリスマス前後の壮大な電飾は目を覆つばかりの現況である。もちろんこれとても美しい、綺麗といふ反応もある。また神戸で催されるルミナリエには震災からの復興、犠牲者たちの追悼という敬虔な気持が籠められているから、即座に不要、無駄といふことは正しくない。しかし、これらは例外的な存在であつて、昼を思わせるような明るさ、明るすぎることによつて、月も見えず、星も見えない。かつて月夜の晩に子供たちは影踏みをして遊んだ。星空の美しい夜には星を見詰め、流れ星があれば、消えるまでの瞬時に、願いごとを掛けたのだつた。

現代は月夜も星空も段々なくなつてきてしまつた。かつて宮本常一さんは「夜が喪なわれてきてしまつたせいで、お化けが出られなくなつてしまつた」とおっしゃつていた。^注現代の生活から「静寂」とか「陰

翳は消えていつてしまっている。谷崎はそうした日本の成りゆきを看破し、予見していた。『陰翳礼讃』が昭和八年（一九三三）であつたもう七十年以上前の本である。『陰翳礼讃』は些やかな一篇の随筆であるが、谷崎の発した警世の書、谷崎が心奥に持ち続けていた文明論の吐露といつてもよいのではなからうか。

6 日本の深い文化伝統

「大きいことはいいことだ」

「明るくことはいいことだ」

「速いことはいいことだ」

といった生活意識は近代日本、現代日本を間違ひなく牽引してきた。そうした意識や意欲が日本の驚異的な発展の支えになつてきたことは疑いのない事実である。大々明々速々といったいわばプラスの志向性が日本の今日の地位を築き上げてきたといつてよい。しかし問題だつたのは、その志向や展開があまりにも強勢で、猛烈であつたことだろう。かつて日本人は大々とともに小々、明々とともに暗々、速々とともに遅々の文化を具有していた。プラスの文化に対して、マイナスの文化の利点、魅力といったものを熟知していた。米欧の文化がどちらかといつとプラスに傾き、やや直線的な単文化であつたのに対して、日本はプラスと同時にマイナスも享受するといつ、プラス・マイナス両極の均衡に注心する複文化であつたといつるかも知れない。兼好は言つ、

「夜に入りて、物の映えなし」といふ人、いと口をし。万のものの綺羅、飾り、色ふしも、夜のみこそめでたけれ。昼はことそぎ、およすけたる姿にてもありなん。夜はきららかに、花やかなる装束、いとよし。人の気色も夜の火影ぞ、よきはよく、物言ひたる声も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。匂ひも、物の音も、ただ夜ぞひとときはめでたき。

（徒然草、一九一段）

「夜になると暗いので物の色合が映えなくて、困る」という人は本当に困る。すべての物は美しさも意匠も色も、夜こそ引き立つのだというのが兼好の主張なのである。人の様子も声も匂ひも音も、すべて「たゞ夜ぞひとときはめでたき」と結論づける。夜の美しさ、暗さの美学といったものが端的に賞揚されている。その主張するところは、谷崎の言つ、

近頃のわれは電燈に麻痺して、照明の過剰から起る不便と云ふことに対しては案外無感覚になつてゐる

という言葉とそのまま重なり合つ。明るさを忌避し、暗さを賞美しようとするマイナスの文化は日本人の長い長い伝統でもある。

キリスト教に深く傾倒した近代の詩人、八木重吉（一八九八〜一九二七）はその詩の中で、こんなふうになつて歌っている。

なんといふわからぬやつらだらう

にんげんはそんな家はいらなんだ、

そんなてかてかむやみにおほきい

歯のつくような住宅なんかよせばいいに、

この世の中から活動写真と芝居と

写真道楽と別荘をなくしてしまへ、

人間のすむ家は

だれもかれも二十円ぐらいの家賃のものにするがいい、

そして野と山を荒していけない

野と山がこれ以上せばまってゆくなら

日本はいきがない国になってしまつ、

みんないちばんいいものをさがそう

そしてなうちのないものにあくせくしない工夫をしよう、

人間一人の生命ためにも

人間すべての生きがひのためにも

なくてよいものをあへぎもとめるのは

なんといふおろかしいことであらうか

（『寂寥三昧』）

余分なものは要らない、「なくてよいものをあへぎもとめるのは」「おろかしい」ことなのである。

二〇〇七年七月、加島祥造氏が一篇の詩集『求めない』を出版した。売り出しより四十万部という大ベストセラーだった。題名の由来はその

詩作の多くが「求めない」で始まるからである。

求めない

すると

簡素な暮らしになる

求めない

すると

いまじゅうぶん持っていると感じづく

求めない

すると

いま持っているものが

いきいきとしてくる

求めない

すると

心が静かになる

求めない

すると

心が広くなる

求めない

すると

心が澄んでくる

求めない

すると

心に平和が広がる

現代日本の世相は混迷している。些細なことから言い争いになり、殺人事件に発展することも少なくない。学校や職場で見られる苛め、その手法や内容は年々悪質、陰湿になるばかりである。弱い者はどんどん切り捨てられていく格差社会、そして先進国中では最多の年間三万人にも上る自殺者。戦後日本の矛盾が行き着くところまで行き着いた感がある。

日本の伝統の中に長く、深くいきづいてきていた「貧」の思想、求めない「すると」とある通り、「貧」の中から生れ出づるものは小さくない。もう一度、プラス文化ばかりではなく、マイナスの文化をじっくりと見据えて、再出発することも必要なのではなからうか。

大きいものを追い求めるより、小さいものに目を向けよう。明るさを追いかけるばかりでなく、暗さの中の美を見付けよう。速いことばかりでなく、もつと遅く、ゆっくりと時を過ごそう。そして富にのみ邁進するのではなく、貧の中の充足した倅せを味わおう。こうした日本の深い伝統に立脚してこそ、現代の可能性は拓かれてゆくかも知れない。

私が環境日本学を提言する所以はここにあり。

(注) これについてはかつて(川村晃生、浅見和彦)『壊れゆく景観 消えてゆく日本の名所』(慶応義塾大学出版会、二〇〇六)でふれたことがある。

本稿は二〇〇八年九月二六日、フランス、アルザス・コルマルで開催された奈良絵本絵巻国際会議(会場Corps de Garde)で報告したものをもとに加筆補正したものです。

なお、本稿は二〇〇八年度成蹊大学研究助成「風景を考える、景観を考える」の成果発表の一部です。

また本稿は二〇一〇年度、武蔵野市寄付講座(成蹊大学)「美しくかつた国へ」でおこなった講義「日本の風土と景観 環境日本学事始」(二〇一〇年九月三〇日、二〇一一年一月二〇日)と内容が一部重なります。詳しくは同講座録を御覧下さい。

「環境日本学」提唱する浅見和彦氏 (成蹊大学教授)

日本の伝統的なものを環境問題に生かせないか。「環境日本学」を提唱する浅見和彦成蹊大学教授は、こうした研究テーマに取り組んでいる。日本が近代化を背景に捨ててしまったものは多く、そうした中から何を取り戻し、いまに応用していけば良いのか。浅見教授の考えを聞いた。



浅見和彦氏 (あさみ かずひこ) 1947年東京生まれ。成蹊文学部教授。NHK文化センター講師。専門は日本文学。日本の伝統を環境に生かす「環境日本学」を提唱。主な著書に『十訓抄』(小学館)、『万丈記』(二)、『世界文化社』、『壊れゆく景観 消えてゆく日本の名所』共著、慶応義塾大学出版会、『NHKカルチャーアワー 文学の世界 日本古典文学・旅百景』(NHK出版) などがある。

「貧」の文化伝統 環境日本学事始

「環境日本学」のテーマは。「日本学では『日本とは何か』を中心に研究しているが、環境日本学として日本的なもの、伝統的なものを環境問題に生かしたいと考えている。例えば音の問題を挙げると、しおどしの竹と石がぶつかる音や聞き、哲学を感じていこうに、かつての日本人は繊細な音を聞き分け、弱音や小音をきわめて大切にしていた。ところが、現代の日本社会は、こうした小さい音を退散してしまつた。物売りの声にしても、まづは人間の心を和ませる音があふれていたのに、それがスピーカーからの音やテロップに変わってしまった」

「それに明かりの問題もある。現代社会ではLED蛍光灯が主流となつてきている。明るくことは大事で、それによって危険を避けるという目的もあるが、昔の人々は暗いことの良さも知っていた。暗い光の中でものを見ただけでわかるか、主役をとつ

音、明かり、手仕事、風景 伝統の良さ 現代に生かす

Interview

たらどういう味わいになるのか、あるいは恋人との間がどう進展するのかが、明るいこの便利な大切さを否定するものではないが、日本人はそうした暗さを使い、楽しむことになつていったのだ。ところが、現代社会は小さい音でも暗さでも追放することにまい進し、これも明るくすれば良いとなつてしまった。日本学の立場から言えば、暗さというのは現代に何とか生かせないかと思つている」

「日本で継承していかなければならないものは、にも細やかさが見られる。それらは日本人が幾世代にもわたって引き継いできたのだが、残念ながら今は無造作に捨てられてしまつてしまつた。建設分野にもつながることが多いのでは」

「日本の野山の風景は曲線が豊かであり、そうした柔らかな曲線が日本の風景の基本線であった。こうした風景とどう調和させるかに気をつけていたのが日本の建設、建築であった。それが近代となり、周辺との調和や美しさというものを、少ないがしづにしてしまったのでは

「日本人はすべてにおいて細やかさを持つていた。完璧を自指した。そのためにはどんな努力も惜しまない。そうした細やかさは手仕事にもみられる。女性はず針をたくみせするために練習したり、包丁つかいや鉛筆削りにも細やかさがあつた。棚田をつくる技術も同じだ。お百姓さんの見事な技術で棚田がつくられ、小さな水面それぞれに美しい月が映つた。これを古典文学では『田毎の月』と呼んだ。雪見障子や引き出し

ないだろうか。すべてがそうではないが、つくれば良い、大きければ良いという時代があった。これからは周辺と調和し、『いいなあ』と眺められるものがつくられてほしい」

「環境の問題をどう考える。日本というのは自然を大切に、自然に生かしてしまつた一番の国だと思ふ。山や海の手が潤沢で、おい

(日刊建設工業新聞 二〇〇八年五月二三日)